

安井広度先生を偲ぶ



略 歴

明治十六年

十一月十四日、京都市下京区間之町通上珠数屋町上ル西宗寺に生まる。五歳のとき、滋賀県高島郡マキノ町蛭口善養寺の養嗣子となる

明治四十年

七月、真宗大学本科卒業

大正八年

六月、真宗大谷大学研究科修了

昭和四年

四月より昭和六年四月まで大谷大学専門部教授、学部および予科教授嘱託

昭和八年

四月、大谷大学専門部兼学部教授嘱託

昭和九年

四月、大谷大学専門部教授

昭和十三年

四月より昭和二十六年六月まで大谷大学教授
七月、安居次講として『維摩経』を講ず

昭和十九年

七月、真宗大谷派講師

昭和二十一年

七月、安居本講として『大無量寿経』を講ず

昭和二十六年

十二月、大谷大学名誉教授

昭和二十八年

七月、安居本講として『顕浄土真実教行証文類』を講ず

昭和三十八年

七月、安居本講として『顕浄土真仏土文類』を講ず

昭和四十三年

四月、宗教振興寄与により銀杯を贈らる

昭和四十三年

七月十四日、自宅にて逝去

安井先生を憶う

本学名誉教授 稲葉秀賢

安井先生が亡くなられてから、既に滿三年が過ぎた。先生に最後にお眼にかかったのはその前年の秋も深まった肌寒い日であった。お言葉ははっきりと聞きとれなかったけれども、やせ細った手をさし出して、なつかしげに力なく握り返され肌の温みが、いままも私の手にのこっている。そしてあの温容がいま眼前に見るように思い出されるのである。

先生は一言で云えば温い方であった。いつお会いしても、あの温さが肌感じられ、文字通りの慈訓が思い出されるのである。そして数々の思い出が脳裏に蘇ってくるけれども、それらは私事に互ることも多いので、割愛して、先生の履歴を辿りながら、その業績を讀みたいと思う。

先生は明治十六年、京都東六条の西宗寺に生れられ、幼少の時、滋賀県高島郡蛭口の善養寺に入寺せられた。明治四十年真宗大学を卒業せられると同時に、熊本の鎮台布教使に赴任せられ、更に上海別院の開教使として海外布教にも従事せられた。その間約七年、研学の志止み難く、大学の研究科に入って、主として『阿含経』の研究に従事せられた。後に『阿含経講義』が刊行せられたが、それは研究科時代の研究が資料となったものと思われる。研究科を終って、福岡の駐在布教に赴任せられ、先生の教化

活動が本格的に花を咲かせるのである。既に熊本に鎮台布教使として赴任せられた時、現在の熊本大学、当時の高等学校（六高）に仏教青年会を設立し、仏教の講義を続けられたことは、晩年に先生がよく語られた述懐であった。その実績に基づいて、福岡に赴任せられると共に、九州大学に仏教青年会を興し、活潑な活動を続けられたのである。福岡時代、先生に育てられた人は非常に多いのであって、教化活動において最も花やかな時代であったと思われる。福岡にいられたのは約十年の長きに及んだが、その間先生の学究者としての研学は孜々として進められていたのであった。かくて昭和四年たしか先生が四十二歳のとき大谷大学に教授として迎えられ、真宗学を担当せられることとなった。私が先生の知遇を受けるようになったのはそれからである。先生は研究科では『阿含経』を研究せられ、又大学では性相科に属していられたけれども、先生の関心は常に真宗学にあった。殊に任田先生の指導を受けられ、大学に赴任せられるまでの間、広く先輩の講録に親しまれ、その広さは驚くべきものであった。どの聖教に就いては、どの講録を読まねばならぬという点などに就いては、懇切な御指導を頂いたものである。先生の学风は緻密であった。一々の言葉の吟味から、聖教は句面の如く頂けという香月院師の指教に基づいて、一言一句も疎略にはせられなかった。そこからあの確な教学の把握がなされたのである。先生は広く深く先輩の講録に親しまれたけれども、所謂詰語的学問に陥ることをせられなかった。こうした基礎の上に立って、全体的に之を把握して、整理統合してゆく力柄に欠けるところがなかったのである。『真宗

七祖の教義概要』とか、『真宗概論』などは、その鮮かな手法を代表するものであつて、長く名著としてのこると共に、いつになつても、その生命を失わぬであらう。また『元祖門下の教学』は、先生の学問的視野の広さを示すものであつて、多くの類書の中で、本書はまこと抜群のものであつて、この書の出版せられた頃が先生の学問的活動の最も盛んな時代であつたと思われる。

先生が広く先輩の講録に親しまれたという、その学風が古いように思う人があるかも知れない。然し先生はまた随分新しい書物にも親しまれ、内容表現と共に驚くほど新しいものを持つていられた。『親鸞とその妻』などはその代表的なものである。この書は刊行当時その新しい表題が問題になつたほどであつて、多くの人に読まれたようである。

凡そ真宗学に志すものは歴史的視野に乏しく、歴史を専攻するものは教養的素養を欠くという欠陥が生れ易い。この点に就いても、先生はその著作に見られるように歴史的視野が広く、その教養的素養とけあつて、独自の学風を持つていられたことが偲ばれる。

この間、先生は真宗大谷派の重鎮として、学階も嗣講、講師と累進せられ、宗学院指導をも兼任せられて嗣講の時代には、安居の次講に『維摩経』を講ぜられ、その講録が『維摩経試解』の名において刊行せられている。更に講師になられてから、本講として『大無量寿経』『教行信証』『同真仏土巻』を講ぜられ、それぞれに、『大無量寿経讃仰』『教行信証本義』『阿弥陀仏とその浄土』として出版せられている。就中、『教行信証本義』は最も

力を竭して講ぜられたものであつて、『教行信証』前四巻の本義を明瞭にせられた名著である。かくの如く先生の学績はまことに花々しいものであつて、その学恩の深さを今更の如く偲はずにはいられない。

先生が学校を辞められたのは、戦後であるが、それは米軍の進駐によって、戦争協力者の追放という不慮の犠牲となられたのであつた。然も先生自身に過失があるよりは、後進の犠牲を助ける為であつたとのことである。それは悲しいことではあるけれども、当時としては止むを得ぬことであつた。学校を辞められてからの先生は悠々自適のかたわら、各地に法輪を転ぜられたのであつたが、晩年になられてからも、暇さえあれば聖教に親しみ、常に筆硯に親しまれた。それは驚くべき精進の生活であつて、先生にお会いするたびに心を衝たれた点である。

かくの如く先生の学績は花々しいものであつたと共に、その学術的活動がいろいろの企画を産み、今に後進を裨益することの多かつたことを忘れてはならない。まことに先生は企画性のある方であつた。

真宗大系の第一回の刊行を見たのは、大正五年十一月であるが、三十七巻が完結するまでには、実に八年三カ月の日月を要したのである。その間の先輩諸師の労苦は筆舌に尽したいものがある。先生はこの事業に深く関与せられ、当時の苦心を語られたことが屢々であつた。その関係から、真宗大系刊行の経済的責任者であつた森清太郎氏と親しく、その志を嗣いで出版事業にその生涯を捧げられた真田真和氏と語らい、続真宗大系二十巻の刊行

を企画せられたのである。その第一回配本が始ったのは昭和十一年七月であつて、それが完結するのにも、五年の歳月が必要であつたのである。その間、先生は編輯主任として、所輯の講録の選択、体裁、校訂凡ゆる面に異常の苦心をせられたのであつて、その幾分を御手伝した私は、当時の先生の精力的活動に眼を見はる思いであつた。そして兩大系の発刊が如何に真宗学界にとつて大きな貢献をしたかは、測り知ることができない。兩大系のおかげで我々は容易に先学の講説を学ぶことができるのである。こうした事業の遂行には強い責任感と使命感とが必要であつて、先生の功績は後の世まで伝えられねばならぬものである。

更に我々は親鸞聖人全集の刊行が、先生を主軸として完成したことを忘れてはならない。この企画を発願せられたのも先生であつた。第一回の配本として和讃が出版せられたのが昭和三十年六月であり、それが完結したのが昭和三十六年二月であつて、その間、経済的にも破綻に瀕したことがあり、出版責任者の真田氏は遂に病にたおれることになつた。その苦難を超えて漸く完成したのは、やはり真田氏の志を嗣いだ宮田氏の援助によるとはいへ、やはり先生の力であつたことを思わずにいられない。そしてこの親鸞聖人全集の刊行が背景となつて、真宗連合学会の結成が実を結んだのである。そこにも先生の学徳と業績の重さを忘れてはならない。

その他、隆寛律師全集の刊行、親鸞叢書の発刊等も凡て先生の企画によるものであつて、その企画性は晩年まで衰えることがなかつた。こうした事業は、所謂営利事業ではないのであつて、ひ

たむきな学問的情熱によつて生れるものであり、その面での先生の限らない功績はまことに銘記すべきものがある。

こうした限らない先生の業績を思い起しながら、先生が真宗学界にとつて、どんなに大きな、又大切な存在であつたかを思わずにいられない。そしてその学恩の深さを今更の如く偲ばずにいられないのである。

最後につけ加えておきたいことは、先生がまた趣味の方であつたといふことである。学究者というと、無趣味の代表のように思われるけれども、先生はそうではなかつた。先生は酒を嗜まれた。見ていても嬉しくなるように、美味しそうに杯を口にせられる姿が、今も眼に浮ぶのである。そして酔が至れば、歌を歌い、学問の敵しさを語られることが度々であつた。あの温容も今はない。

また先生が碁に強かつたことは余りにも有名であつた。ノンブロ二段を自称していられた。無趣味な私は先生の碁の手ほどきを受けることさえなかつたけれども、元学長の関根仁応先生と手合せせられるのを拝見したことが数度ある。互に冗談をかわしながら、先生の碁は堅実そのものであつたことを思い出すのである。碁はその人の性格を示すといわれるが、如何にもと感ぜられたことである。こうして先生は多才な方であつた。特に学問的的事业における企画性には、最も深く敬服せしめられるものがあつた。これは誰にもできることではない。人徳と学徳とが兼備しなければ、その事業は成功しない。先生はその両面を兼ね具えていられたのである。先生を失つていよいよ先生の学徳の重さを偲ばずに

はいられない。その他先生の思い出は尽きないものがあるが、今は割愛せざるを得ない。

〔主要著書〕

覚信尼公と大谷本廟	昭7・2	法蔵館
阿含経講義	昭7・10	東方書院
真宗七祖の教義概要	昭10・6	法蔵館
法然聖人門下の教学	昭13・3	法蔵館
維摩経試解	昭13・7	安居事務所
真宗概説	昭15・7	真宗典籍刊行会
大無量寿経讃仰	昭21・7	安居事務所
親鸞とその妻	昭26・8	真宗典籍刊行会
教行信証本義	昭28・7	安居事務所
顯浄土真仏土文類講讀	昭38・7	安居事務所
その他		